

鎌倉幕府から室町幕府へ

二度にわたる元の襲来



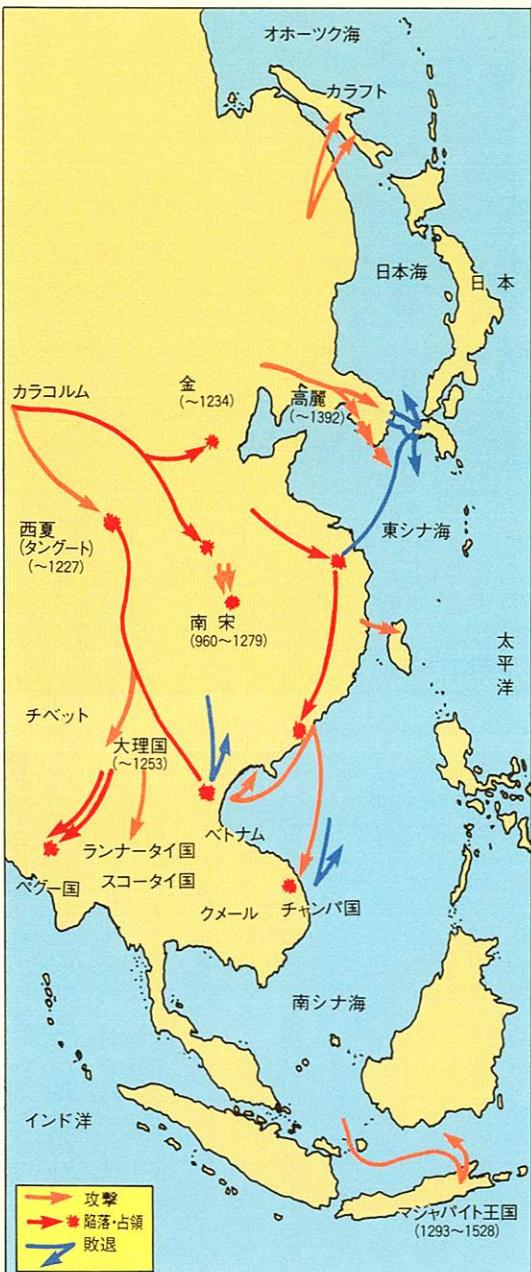
元寇の防壁(福岡県 博多湾今津地区) 防壁の高さは約2.6mくらいある。



至大通寶 市内熊川出土
錢の一部。武宗時代の
1310年(至大3)が初鋤年。

一三世紀の初め蒙古の草原に興ったモンゴル帝国は、またたく間に東部ヨーロッパにまで至る広大な地域をその支配下におくことになった。そのころ中国では、宋が北方の金に圧迫されて華北から華南の地に逃れ、南宋とよばれていた。やがて金を滅ぼしたモンゴルは、一二七一年(文永八)國号を建てて元と号した。元の領土拡張戦略の鉢先は、南はビルマ、ジャワから北は樺太(サハリン)に至るアジアの諸地域に及び、当然のようにわが国にも向けられた。皇帝のフビライは五度にわたって朝貢を求める国書を送つてきたが、執権の北条時宗はそのすべてを拒絶した。

元は南宋追い落としに成功すると、次の侵略の主要な標的として、インドシナ方面と日本を選んだ。元の日本襲来は必至となり、幕府は九州の防備を固めるために、西国に所領をもつ東国の御家(いえ)人に西国下向を命じた。案の定、元は一二七四年(文永十一)と一二八一年(弘安四)の二度にわたり襲来したが、いずれも失敗に終わった。元の侵略はインドシナ方面でも成功しなかった。



アジアの元寇 (『週刊朝日百科日本の歴史』参考)

しかしわが国にとつて、二度にわたる元の襲来の余波は大きかつた。将軍と主従関係で結ばれた御家人は、戦費の負担にあえぐ一方、得宗（北条氏嫡流）の強権政治だけが強まつたため、御家人・公家たちは幕府から離反するようになつたのである。

また鎌倉幕府の政治の基盤は、一族の長のもとに同族の在地領主が結集するという物領制にあつたが、幕府が西国を中心元の再来に備えるため、惣領以外の庶子の独立を黙認したので、物領の権威が揺らぎはじめた。

このような状況は、やがて幕府の政治に大きな影を落とすようになつていった。

■鎌倉幕府の滅亡



このような状況のなかで、鎌倉幕府の基盤となつてゐる御家人の生活は、日を追つて苦しくなつていつた。所領の質入れや売却によつて所領をもたない御家人（無足の御家人）となつていくものが多く、幕府はこれをくい止めるために、一二六七年（文永四）に最初の徳政令（所領回復令）を出した。さらに一二九七年（永仁五）に非御家人、凡下（武士でない庶民）に質入れ、売却した御家人の所領を無償で取り戻すことのできる「永仁の徳政令」を出し、御家人の救済に乗り出した。しかし功を奏せず、御家の没落は急速に進んだ。

御家人が土地を手放し没落する反面、その土地を集めて急成長した悪党とよばれる非御家人が、幕府に反抗するようになつてきた。悪党というのは、反幕府、反荘園体制的な行動をとつた在地領主、新興商人、有力農民などの集団である。

諸国の悪党の蜂起は内乱状況を生み出し、これに乗じて後醍醐天皇は一二三四四年（正中元）と一二三一年（元弘元）の二度にわたつて討幕の計画を立てたが、事前に幕府方にもれ、隱岐島へ流されてしまつた。しかし天皇の挙兵は各地の反幕府勢力に大きな影響を与え、ぞくぞくと討幕の動きが起つた。一二三三年（元弘三）関東では新田義貞が兵をあげ、小手指ヶ原（所沢市）や分倍河原（府中市）で幕府軍

を撃破し、鎌倉に流れ込んだ。十四代執権北条高時は自害し、一五〇年づいた鎌倉幕府は滅亡した。

■足利尊氏の登場

鎌倉幕府滅亡後、京に戻った後醍醐天皇は、いわゆる「建武の中興」の新政を行った。しかし功労者に対する恩賞の土地も不足しており、人びとの不満が絶えなかつた。さらには、天皇の権威を誇示し維持するための大内裏の造営を計画したが、それとともになう課税に、新政権への反発はしだいに高まつていつた。新政権に失望した人たちの心をとらえたのは足利尊氏であつた。新政権は尊氏に武藏、相模、伊豆を、弟の直義に三河を知行国として与え、そのうえ直義が相模守に補任されたため、関東の武士は足利氏の支配下に入つた。

鎌倉幕府滅亡後の一三三五年（建武二）、北条高時の遺児時行は信濃（長野県）で兵をあげ、鎌倉をめざした。「中先代の乱」といわれるもので、武藏国に進んだ時行の軍は、女影原（おなじがはら）（日高市）、小手指ヶ原（所沢市）、武藏国府中（府中市）、井手の沢（町田市）で直義の軍と戦つた。京にいた尊氏は後醍醐天皇の許可を得ないまま出陣して直義軍と合流し、時行軍を破つて中先代の乱を鎮圧した。

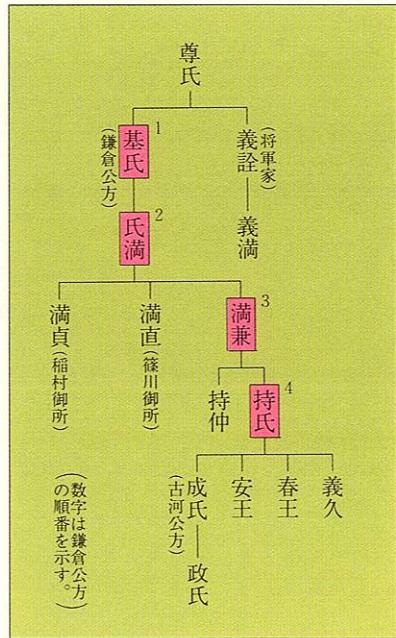
やがて尊氏は新田義貞を討つことを名目に、建武政権に反旗をひるがえした。そして後醍醐天皇から尊氏追討の命をうけた義貞を箱根で破つていつきに上洛し、持明院統の光明天皇（後伏見天皇の第二皇子）を擁立して、一三三六年（建武三）室町幕府を開いた。このため後醍醐天皇は吉野に逃れ、ここに南北朝の内乱が始まつた。



太平記石浜合戦碑（石浜渡津碑） 1352年（觀応3） 南朝
方の新田義興（義貞の子）が足利尊氏に挑み、尊氏が
野合戦が繰り広げられる。金井原の戦いで敗れたて建てられた
石碑。

■鎌倉府の関東支配

足利尊氏は自らを鎌倉幕府の継承者と位置づけ、し
だいに後醍醐天皇や公家勢力と対立するようになつて
いつた。一三三五年（建武二）、武藏、相模、伊豆知
行国を足場に、尊氏は関東支配の拠点として新たに鎌
倉府をおいた。



鎌倉公方略系図

正平四）その弟の基氏が鎌倉公方に就任し、鎌倉府が成立した。鎌倉府が統括していた国は、義詮、
基氏の時代は一ヵ国（伊豆、甲斐、信濃、相模、武藏、上野、下野、上総、下総、安房、常陸）で
あつたが、のちに信濃が幕府の支配下に入り、陸奥、出羽両国が鎌倉府の管轄になるなど、時の政治
の状況に応じて変化した。

鎌倉府の成立当初は、軍事権だけを行使する機関であつたが、やがて幕府に準じた組織をもつ行政
機関に変化した。それとともに、鎌倉府の権限も警察権や土地支配権など、広範囲に及んだ。鎌倉
公方はこの権限を利用して関東の武士との主従関係を強化していくが、このことがのちに室町幕府
と不和となる原因ともなつた。

関東管領は公方を補佐するものであり、一三六四年（貞治三・正平一九）に上杉憲顯の子憲春が就
任して以来、上杉氏が独占世襲することになつた。